

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 60 号

2007 年 3 月



仁田沼雪上観察会

2月4日（日）に仁田沼雪上観察会を実施しました。参加者は17名でした。

今年の冬は、記録的な暖冬で、今回の予定コースも前の週には雪がほとんどない状況でした。しかし前日に久しぶりにまとまった雪が降り、何とか雪を踏みしめての観察会をすることができました。駐車場からしばらく続くアカマツ人工林の登りでは、アカマツの間を縫って広葉樹が伸びだしています。そんな中、鎌田さんがアオダモを見つけるとアオダモの冬芽の色を表す日本語を調べた結果、「鳩羽ねずみ」と呼ばれる色に最も近いことを参加者に披露してくれました。私は「ハトバネズミ」と言う語感から「波止場に棲む鼠」を連想してしまい、暫くしてようやく鼠ではなく鳩の羽にたどり着くことができました。

仁田沼では、高橋さんが持参した雪の比重を計る道具を使い、新雪としまった雪の比重の違いを実証し、雪の量と水の量の関係を分かりやすく説明してくれました。また今年の積雪は40cm足らずで以前に同じ時期の観察会で計ったときより100cm以上も少ない積雪量でした。男沼の水場付近で昼食をとりました。例年結氷してワカサギ釣りができる男沼ですが、今年は全く氷がなく波打つ水面が異様に感じられました。あけぼの湿原を経由しての帰路では、熊棚や小沢にできたしぶき氷などを観察し、登山口に戻りました。



樹皮の割裂痕（コブシ）

目覚めると少なからず吹雪いている。「おかしい!？」今日は立春、例年なら節分の荒天が一変して穏やかな陽光が差す筈、、、。少し暦がずれたのだろうと松川まで来ると道は乾燥していた。「良かった〜♪」と思ったら市内に入って裏切られた。余裕で到着の筈がギリギリの到着となり、もう殆どの方が集まっていて参加手続きをしている。仁田沼の駐車場までは4台の車に分乗させて貰う。車内でのおしゃべりで修学旅行の女学生気分になる。土湯温泉の市民センターでトイレ休憩。2つしかないけれど立派なトイレだ。そこからのくねくね道は雪道だけに運転する方の苦労が思いやられ、ひそかに恐縮する。

仁田沼駐車場で身支度、準備運動・オリエンテーションをして歩き始める。夏道では何度か訪れた事はあるが、冬は初めてだ。入り口からいきなり反対方向へ行きかけて慌てて引き返し、皆の後を追いかける。登り始めは15cmそこそこだったけど、段々雪が深くなって来た。傾斜がきつくスキー板の扱いに困る場所もあって、此处は「公園」ではなく「山」なのだと思えて思い知らされる。風が冷たく雪も吹き飛んで来る。一瞬、強い風が吹いて木々に積もって居た雪がリズムカルにバサバサと落ちて来る。「会えて嬉しいよ!」と滅茶苦茶握手された感じで「私も嬉しいよ!」と返礼したくなる。

高橋さんが熊棚を見つけ熊の受難の話のあれこれをしてくれる。優れた自然観と再認識されているアイヌ文化の中では熊はカムイ(神)の使いだとか。(キリスト教で言えば天使だ!?)遊歩道の直ぐ傍に作られていた熊棚は「此处は山だよ! 神の領域だよ!」と警告しているような気がした。山の自然と一対一で対峙する瞬間がとても好きで、つい先頭に発ってしまうのだけど、仁田沼分岐からゆるやかな心地良い登りに誘われて進んだ先にニガキかな?と思える大木を見つけ、「これは訊いておかねば!」とじっと木を眺めながら皆を待っていたら、どんどん後ろが静かになる!よくよく見たら仁田沼は分岐から直ぐ目の前にあり、私は女沼方向の道に誘惑されてしまっていたのだ。

仁田沼の積雪は39cmで例年の1/3だとか。周囲の林は風当りの所為か枝の雪は皆吹き飛んでいる。すくすく伸びて風に揺れる様が空に手を振っている様だ。落葉樹の中に細々と生育しているアカマツ。いつか「マツやカラマツは聞き分けの良い子で、どんな環境でも育つけど、本当に自分の好きな場所だと筋良く育つのだ」と聞いた事がある。アップダウンを繰り返して男沼の岸辺の林の中で昼食を摂る。近くに伸び伸び天を目指しているアカマツを見つけた。「自分の居場所が見つかって良かったね!」と嬉しくなる。男沼に35年間通っている高橋さんが凍っていない男沼を見るのは初めてだと言う。私の地域で今年の歳神の日は雨だったが、これは私が〇〇年生きて来て初めての事。地球温暖化が直ぐ傍まで来ている不気味さだ。

帰り道、林の中に入ると風が急に穏やかになる。守さんが何気なく「木があるとこんなに違うね」と呟く。徐(しずか)なること林の如し・・・黙っている木々にどれだけ恩恵を受けているか、じっくり考えてみなければと思った。



早稲沢観察会報告と百貫清水の現状

編集部

2006 年 10 月 22 日（日）に早稲沢遊歩道紅葉観察会を実施しました。参加者は 16 名でした。

晩秋の西吾妻山麓の早稲沢遊歩道を訪れました。さすがにこの時期ともなれば、この流域に多く植生するシシウドも散状に結実した果実の姿を見せるのみで、大半の 1 年生植物は葉を落とし、わずかに枯れかけた姿を留めるのみとなっていました。それでもしっかりと緑の葉をとどめていた葉の形からタニタデ、クロクモソウなどの珍種を見分ける会員がいました。また沢近くでは夏に咲くセンジュガンピの花が奇跡的に咲いていました。一方この季節でも楽しめるのがシダ植物です。タニワタリ、サカゲイノデ、トラノオシダ、リョウメンシダ、クジャクシダ等 20 種類近くのシダ植物を観察することができました。

布滝付近ではカエデ類の紅葉とブナを代表とする黄葉そしてキタゴヨウマツの緑のコントラストが抜群の景観を構成していました。布滝から百貫清水までのブナ林帯ではブナの大木の見事な紅葉に参加者はみんな圧倒された感がありました。

しかし百貫清水周辺の景観はそれまでとはあまりにも異質なものでした。かつて、百貫清水周辺が整備されたとき山側に歩道を開くなどあまりにも自然の生態に無知な工事に対し県自然保護協会から批判され、改修する事件がありました。その際は、百貫清水の周辺にはロープを設置し、歩道も最低限の広さに整えるものだったと記憶しています。それから 10 年が経過し、あまりにも周辺の植生回復に対し配慮に欠ける補修工事が行なわれていました。歩道いっばいに敷き詰められた砂利は清水へ流れ落ちそうな状況となり、踏み荒らしを防止するために、当初設置したロープは既に撤去されていました。工事は冬期間を挟んで今春から再開となる模様です。工事内容の変更を含め、関係者へ適切な対応を求めていると思います。建設当時、あれほど慎重であった地元行政機関も担当者が変わる、クレームを付ける者もいない。マスコミも話題にしないとなると過去の経験は無になってしまふということが顕著な実例ではないかと思います。観察会などを通した監視の必要性を改めて実感しました。



2006 年 10 月 22 日の百貫清水



1996 年 5 月 3 日の百貫清水



案内板周辺の整備状況

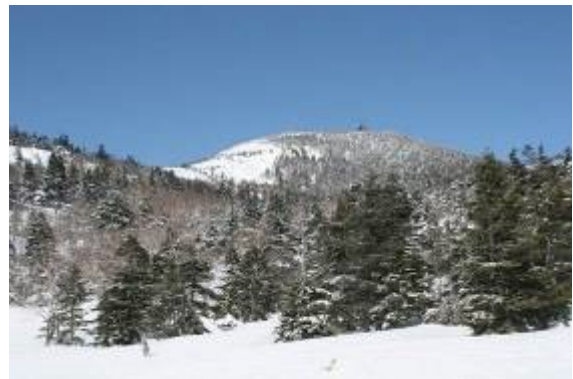
凍らない湖、雪の無いスキー場、103年振りの暖冬、等々、毎日のように話題は異常とも言える暖冬のことである。今年の冬は何回、雪が降っただろうね。職場や家族との会話でもそんなことが多くなった。2月末の気象庁のデータでは1、2月の平均気温が平年(過去10年間の平均)と比較し1℃～2℃高いとのことであった。原因はエルニーニョ現象(南米ペルー沖の海水温度の上昇)による海流の変化ということをも主張する専門家が多いが。さて真実は?一方、今冬の世界的暖冬の現象が各地で報告されると同時に「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」により今世紀末の気象についてレポートが発表された。それによると、二酸化炭素を始めとする温暖化ガスの増加により年間平均気温が現在より6℃以上上昇するとのことである。また、この気温上昇に伴い、夏季には北極の氷は消滅してしまうという。日本では、本州のほとんど地域において、冬と呼べる季節の区分が出来無くなるという。当然、高山を除けば雪は見られなくなるのである。

私たちは、四季の変化による生活スタイルや文化を育んできた。特に雪国と呼ばれる地域では、雪は良きにつけ、悪しきにつけ、不可欠なものとなっている。豪雪で有名な奥会津においても今冬は結果的に悪影響が出ているという。これからが心配だとは多くの人の声である。害虫の大量発生、大規模な水不足、悲観的な予測が飛交っているが、その原因は全て人間であるのは紛れも無い事実である。

地球環境を論じた地球サミットが1992年ブラジル・リオデジャネイロの開催されてから15年余り経過しようとしているが、ことは何1つ改善されていないばかりか、より以上の悪化を招いているのである。教育現場や行政機関、政治の世界において、声高々に訴える人たち、「地球環境は大事です。」「温暖化を食い止めなければ」しかしその一方で、大型高級自動車や快適環境を求めてエネルギーの消費を加速させているのは当人達である。いま日本では少子化が問題視されている。原因は子育て環境の未整備であるとのことから、支援施策が国、地方において目白押しである。しかし、環境が激変していたら、生存可能なのだろうか。生物の本能として、生存の危機を感じ取った結果による少子化で無ければよいと思うが。だれもが経験したことのない暖冬、劇的な気象変動へのターニングポイントかもしれない。そんな悲観的な思いが駆け巡った冬であった。



高山のブナ



麦平より高山山頂

国有林野保護監視員研修会参加報告

去る2月18日、福島森林管理署において平成18年度国有林林野保護監視員研修会が開催され、同時に行われた委嘱交付式において、当会より高橋他5名(都合により欠席1名)が新たに監視員として委嘱された。この制度は、国有林内における植物の盗採(盗掘)や不法投棄の監視そして登山者など、利用者への指導が主な職務となるボランティアで、福島森林管理署管内(郡山市以北の中通り地方の国有林が対象)では79名が委嘱されている。

最近、高山植物の大規模な盗採や登山者による踏付けが各地で報告されており、その責務は大変重いものであるが、出来る範囲の中で貢献していきたいと考えている。特に最近是对応する相手が犯罪集団と思しき集団に遭遇する場合も多くなり、身の危険を感じることもさへあるとは先輩監視員の話、また、禁止されている「かすみ網」による野鳥の捕獲も平然と行なわれているとのこと。特に高山の「鳥子平周辺」は密猟者にとっても穴場であるという。高山を活動のシンボルとする当会にとっても、寝耳に水とはまさにこのことである。

また、近年、増加傾向にある「犬連れ」などに見られるペットの問題についても規制の対象とすることの必要性を多くの監視員が訴えていた。モラルの低下が言われようになって久しいが、電線、ガードレール等の金属類の相次ぐ盗難事件が頻発する今日の状況を考慮すると、人々の監視がほとんど及ばない山林内、想像も及ばない犯罪が横行しているのかと思うと恐ろしさを覚える反面、そのような非合法な手段で市場に供給される希少動植物を買い求める愛好者が何の罪悪感も感じていないのは大きな問題ではないだろうか。監視活動などの草の根活動と相まって早急な法制度の整備、そして愛好者や販売店への啓蒙、注意喚起が必要である。

福島のもうひとつのブナ科林帯

山内幹夫

福島県は東西に広く、浜・中・会津と気候がそれぞれ異なる地域に分かれている。当会の自然観察会でおなじみのブナ林やコナラ・ミズナラ林は越後山脈から奥羽山脈そして阿武隈山地にかけて広がっているが、スダジイやアカガシ・ウラジロガシなどのブナ科の照葉樹林帯が浜通りの海岸線沿いにせまく分布していることも知っていただきたい。照葉樹林帯はブナやコナラ・ミズナラのような広い森林を形成することなく、海岸の崖線や丘陵部に樹叢を形成したり、防潮林・防風林や神社の森というような形で分布しているにすぎない。いわき市の波立薬師海岸や塩屋崎の樹叢は有名であるが、双相地区の海岸でも、阿武隈山地から延びた丘陵が海岸線と接する部分には照葉樹の樹叢が形成されている。ちなみに砂浜にはクロマツが繁茂している。

照葉樹の樹種は、ブナ科のスダジイ・アカガシ・シラカシ・アラカシ・ウラジロガシ、クスノキ科のタブノキ・シロダモなどが主な高木で、ヤブツバキ・ユズリハ・アオキ・ヒサカキ・アセビ・ミヤマシキミ・トベラ・マルバシャリンバイ・ツルグミ・マルバグミなどが混ざる。落葉樹が冬枯れする季節、陽光にかがやく常緑の葉は、美しく暖かさを感じさせる。

吾妻山系や安達太良山系の高山植物や高層湿原には氷河期の遺存種が多く存在するが、浜通りの照葉樹林帯は、氷河期か終焉し縄文時代早期後半から前期（約 7000 年～5000 年前）にかけての温暖期に形成されたものと推定されている。約 6000 年前頃は地球の温暖化がピークに達し、海水面が今よりプラス 3 m 上昇したことが知られている。その頃までにシイ・カシ・ツバキ・クスノキなどの常緑広葉樹を指標とする照葉樹林帯が広がり、東北地方は海岸線沿いに青森まで北上した。現在福島県の浜通りに残る樹林帯は、そのような縄文海進期と呼ばれる温暖期の名残ということになる。

浜通りの照葉樹林帯は、海岸に接しては純粋な樹叢を形成するが、海岸から少し離れると落葉樹との混在となる。それでも国道 6 号線から東では照葉樹の分布密度が高いが、西側では極端に低くなる。例として、檜葉町の天神岬南斜面の様子を木戸川河口付近の南岸から見ると、海蝕崖から西に約 300m までは純粋な照葉樹の樹叢であるが、それより西になると落葉樹との混交を呈する。その林分は明らかである。照葉樹の樹種も海岸に接しているほど多い。特にタブノキ・トベラ・マルバシャリンバイ・ツルグミ・マルバグミはほとんどが海岸に接した位置に植生している。アカガシやウラジロガシ、シロダモは山麓近くでも見ることができる。縄文時代前期の頃は、海岸線から阿武隈山地山麓にかけては照葉樹林が広がっていたものが、後世の開発に伴う伐採の繰り返しによって、範囲も狭まり現在のような状況になったものであろう。

皆さんもぜひ一度は海岸の植生をご覧になっていただきたい。夏の浜にはハマヒルガオやハマエンドウ等の海浜植物が満開で、海に面した丘陵の麓にはマルバシャリンバイ・トベラの花が咲き、秋にはハマギクやコハマギク、ツワブキの花が美しい。そして、海沿いの丘陵斜面や防潮林・神社の森などに狭く残された照葉樹の樹叢は、その植生史的意味合いからも、今後保護されてしかるべきものということに考え及んでいただければ幸いである。



檜葉町山田浜海岸のツワブキ



檜葉町波倉稲荷神社のスダジイ林

秋田県も南北に長い県である。北部の青森県境は白神山地、南部の山形県境は神室山地、宮城県境には栗駒・虎毛山塊が横たわる。その共通キーワードは「ブナ」である。白神山地はいわずもがなの地域ですが、今回はあえて問題の山を紹介します。見栄えのするブナは、ない山です。また、秋田県南部の山は、山頂湿原という見事なビューポイントがあるがゆえ、見事なブナ林には目がいけない山。どちらも、ある意味でブナが見えない、見られない山である。

47) 白神山地・ニッ森と泊岳（秋田県）

白神山地の南部、悪名高い青秋林道はニッ森の手前で工事は止まった。今では、道路周囲に広がる伐採跡地が何とも痛ましい。秋田側はほぼ皆伐状態であったが、その奥地である青森側には豊かなブナ林が広がっていた。その森に狙いを付けたのが青秋林道であった。工事の阻止には長い時間を要したが、その先に待ち受けていた森林生態系保護地域指定、さらには世界遺産指定へのスピード感には、私には追いていけなかった。

今、ニッ森は白神山地を訪れる観光客で賑わっている。僅かに残されたブナという木をバスに乗って見にくる。鋭い山容を見せている泊岳は不遇の山である。登山口は「森林生態系保護地域」設定の大きな看板の脇であるが、入口を示す案内はない。僅かな踏み跡をたどるが、ここは伐採地の中。ブナなどあるはずもない。一旦、コルへ下って、今度は登り返しとなるところが、人気の無いゆえんかも知れない。わい性化したブナは見られるが、ニッ森ほど太いブナはない。山頂からは秋田側の見事に伐採された斜面を見せ付けられた。途中で見つけたシナノキの大木が、見事に輝いていたのが、救いだった。

コースタイム：登山口（1時間）泊岳（1時間）登山口、登山口（45分）ニッ森（45分）登山口

48) 虎毛山

山頂湿原の広がる虎毛山は、人気が高い。しかし中腹に広がるブナもまた味わい深いものがある。入口から古い林道跡を歩くが、変化に乏しい。やがて山腹に取り付くとブナの森に変わる。見上げたり、見下ろしたり、横から構えたりとカメラが忙しくなる。訪れた季節は秋。林道ではあまり紅葉は進んでいなかったが、

このブナ林は見頃だった。見頃は丁度ブナ林で、湿原は既に枯れていたから、微妙なものである。ところが、登山者は森を仰ぐでもない。森はなるべく早く通過する場所なのかも知れない。私も若い頃は、早く山頂にたどり着きたくて、森を見ない状態であった。しかしブナが被写体としても素晴らしいと気付いたのは、1982年の会津駒ヶ岳の山スキーであったから、ブナを意識してまだ25年しか経っていないことになる。高松岳との縦走路に出ると、ブナはわい性化して紅葉も汚くなっていた。

コースタイム：赤倉橋（1時間30分）急斜面取付き（45分）主尾根（45分）虎毛山（2時間）

赤倉橋

泊岳途中にあった見事なシナノキ（左） 虎毛山途中のブナ林は丁度紅葉の真っ盛りだった（右）



ダケカンバ (*Betula ermanii*カバノキ科カバノキ属)

亜寒帯過湿気候帯の代表的落葉広葉樹であるが、ブナ林から亜高山帯まで分布域は広い。樹皮色に特徴があり、光線の具合により肌色、またはピンク色を帯びた白色系を呈し美しい。しかし幼木の樹皮はチョコレート色に白い皮目が混じり、おおよそ成木のイメージとはかけ離れている。枝は長枝と短枝がある。葉は長枝は互生、短枝では葉が2枚(1対)着生する。雌雄異花で雌雄同株。花は集合花で穂状花序。雄花序は長枝の先端に数個着生し、雌花序は雄花より下部の短枝の先端に1個着生する。小花は雄花、雌花ともに1つの苞に3花ずつ着生する。雄花の雄しべは3個。雌花は赤い雌しべが緑色の苞の先からのぞきそのコントラストが美しい。開花は5月~6月で、展葉と同時に開く。発芽時には青葉アルコール(フィトンチッド)が発散されるため、初夏の吾妻連峰では森一面が青く霞むブルーマウンテン現象を呈する。



雌花

ダケカンバは陽樹であり、寿命も長く、カンバ類では最も環境適応性が強い。また最も植生域の標高が高く森林限界ダケカンバ林を形成する。堅果には半透明の翼があり、風で散布される。ブナ、オオシラビソ林でも倒木などで林床に日の当たる空間(これをギャップという)ができると容易に発生する(これを先駆性という)ので思わぬところで大木化したダケカンバの孤立樹に出くわすことがある。吾妻・安達太良連峰では900mから2000mを越える頂上付近まで植生するが、吾妻連峰では梅平付近、安達太良連峰では鬼面山北面のダケカンバ林が特に美林である。なおダケカンバとよく誤認されるシラカンバはカンバ類の中では最も環境適応性が狭く分布域は中部山岳等極めて限られており福島県には自生地はない。ダケカンバ(岳樺)は標高の高いところに植生することから命名されたが、別名をソウシカンバ(草紙樺)とも言う。これは剥離した樹皮を紙の代わりに用いたことに由来する。

アオイスミレ (*Viola hondoensis* スミレ科スミレ属)

落葉広葉樹林の湿り気の多い林床に植生するスミレの仲間。日本固有種。スミレの仲間では開花期が最も早い。日本で普及している外国産スミレの園芸種にニオイスミレというのがある。このスミレは濃い青紫で開花期はきわめて早く福島でも3月になると咲き始める。アオイスミレはこのニオイスミレの仲間である。開花期が早いのはその性質を受け継いでいるためかもしれない。このほかに日本に植生するニオイスミレの仲間はエゾノアオイスミレだけである。ニオイスミレの仲間の特徴は雌しべの花柱の先がカギ型に下に曲がっていることである。



アオイスミレは株全体が毛深い印象である。開花時の葉は比較的小さく形は丸く毛が多い。若い葉は葉の両側が筒状に丸まっているのが独特である。この葉の形が徳川家の家紋である「葵」(フタバアオイ)の葉に似ていることが命名の由来という。また葉のつけ根にある托葉も縁に毛がある。花は花弁全体の縁が波打っており、側弁はあまり開かない。側弁基部には毛があるものと無いものがある。唇弁は広く大きくよく目立ち、中央には紫条が走る。上弁は比較的小さくウサギの耳に似ているため花全体の姿はウサギのイメージがある。花色は薄紫色であるが限りなく白に近い株もある。花の萼片も有毛である。ニオイスミレの仲間だけあって花は芳香を放つ。距はタチツボスミレのように立ち上がっており、太く凹凸がある。

吾妻・安達太良連峰でも沢や融雪水の停滞する凹地周辺で見られることが多い。条件が整うと日当たりの良い土手にも群落を形成することがあるが、通常は数株程度でコロニー状に植生する。分布域は局地的であるため、散策していても出会う機会は少ない。そのため、私もこのスミレを見つけたのは他のスミレに比べて遅い方であった。初めて出会った時はコケティッシュな花の形もさることながら、花を撮影しようとして近づいた時に感じたかぐわしい香りに驚いたことを記憶している。

第 89 回自然観察会案内：高山の雪上観察会

日時：4 月 22 日（日）7：30～15：00

集合場所 四季の里交差点正面入口駐車場 集合時間 7：30 参加定員 20 名

内容 鳥子平から高山山頂まで散策し、北限のシラビソの植生を確認するとともに、ウインドフ
ォームなどの針葉樹林の冬の姿や亜高山針葉樹林帯に生育する広葉樹を観察します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着
替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、冬季歩行用具（スノーシュー、カンジキ、スキー）

* 装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（300 円）

申し込み：4 月 21 日（土）まで

参加申込先：高橋淳一（TEL 024-593-1990）または佐藤守（TEL 024-593-0188）

電話またはメールにて申し込みください。（電話申込はいずれも夜間 7 時～9 時でお願いします）

第 90 回自然観察会案内：植林活動と龍ヶ岳観察会

日時：6 月 2 日（土）7：30～15：00（小雨決行）

集合場所：福島県農業総合センター果樹研究所（旧果樹試験場）

集合時刻：7：30 参加定員：無制限

内容：午前中はこれまで植林してきた箇所の補植（広葉樹 150 本）を行い、昼食後、午
後は龍ヶ岳観察会です。

準備するもの：作業に適した服装・手袋（作業用）・登山靴・長靴等、雨具、昼食、飲料水、着
替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、その他（あればカマ・スコップ）

参加費用：保険代（300 円）

申し込み：6 月 1 日（金）まで

第 91 回自然観察会案内：西吾妻山誘導ロープ補修ボランティアと観察会

日時：7 月 1 日（日）7：30～16：00（小雨決行）

集合場所：裏磐梯ビジターセンター駐車場（福島在住者は四季の里 6 時 30 分）

集合時刻：7：30 参加定員：20 名

内容：西大巔～西吾妻山避難小屋間の登山道の誘導ロープ補修と高山植物観察

準備するもの：作業に適した服装・手袋（作業用）・昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、
防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳

参加費：保険代（300 円）＋ゴンドラ往復（グランデコ）（1500 円）

申し込み：6 月 30 日（土）まで

参加申込はいずれも高橋淳一（TEL 024-593-1990）または佐藤守（TEL 024-593-0188）電話またはメー
ルにて申し込みください。（電話申込はいずれも夜間 7 時～9 時でお願いします）

20 周年記念会報の原稿を募集しています！！

自然保護に関する意見、評論、思い出、論文、観察記録、エッセイ、写真、イラスト等をお寄せ
ください。字数は 1200 字程度とします（内容によりこれより多くてもかまいません）。

締め切り：5 月 31 日

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」へ

【編集後記】■市民スキー場として親しまれた高湯温泉「吾妻スキー場」が今年、休止となった。リフ
トを活用すれば、2 時間足らずで、吾妻の主稜線に行くことができることから、土日は多くの山スキー
家で賑わっていたが、一変し、静寂が支配する世界となった。そして、2 時間以上も余計に費やさなけ
れば辿り着けないが、これまでにない感動や充実感を味わうことができた。来年は営業の再開を検討し
ているとの噂もあるがいかにか？（JT 記）。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第 60 号 2007 年 3 月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：高橋淳一 Phone 024-593-1990（夜間 7 時～9 時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500 円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木